

第1章

「未来へのレール」となった

1冊の本

本書の主人公であるトーマス・アルバ・エジソンが生まれたのは1847年、アメリカ合衆国という新興国が誕生してから70年ほど経ったところだ。彼が**14歳***になる1861年には奴隷解放を訴えたエイブラハム・リンカーンが大統領になり、以降、約5年間にわたって国内を二分する南北戦争が続いたのだから、かなり激動の時代に育ったことがわかる。

幼少期のエジソンのエピソードとして伝記物語の序盤の目玉になっているのが、小学校を退学させられてしまった話だ。史実だと思われるものだけを並べていくと、そこに至る経緯はこうなる。

学校に入るまでのエジソンはとにかく好奇心が強かったようで、周囲の大人にすぐ「これはなぜ?」「どうしてそうなるの?」と質問していた。このため、けっこう煩わしい子供だと思われていたようだ。また毎日のように家の周囲を歩き回り、いろいろな発見をしている。ただし、このような幼少期のエピソードだけを見て、「規格外の子供だ」と決めつけるのは早計だと思う。何にでも興味をもつのは小さな子供にはよくあることだし、7人きょうだいの末っ子で年長者に囲まれて育ったという家庭環境を考えると、「周りの人に聞けば、なんでも答えてくれる」と信じていたとしてもおかしくないからだ。

伝記本の定番エピソードであるガチョウの卵を孵化させようと自分の腹で温めていた話は事実だったようだが、これもそれほど特異な行動とは思えない。「卵は温めれば孵る」と言われれば子供なら試したくなるものだ。しかも、目の前にガチョウの巣があるような環境に育てば、なおさらである。そして、それを見つけた大人に「何日もかかるし、君はガチョウじゃないから無理だよ」と笑われ、あきらめる。けっこう日常的な光景だと思う。

それでもエジソンの場合は遠くから聞こえる音が少し遅れることに気づいたとか、車輪の大きさと走行性能の関係を知らうと馬車の行列をずっと観察していたといった話が数多く伝えられており、物事を科学的にとらえようとするセンスは早くから発達していたようだ。ただし、ひとつのテーマをとことん掘り下げていく学究タイプではなく、いろいろなことに幅広く関心をもつ企画者タイプであり、そう考えると大学には行かず発明家を目指したのは正解だった。

ところで、子供時代のエジソンは一人で行動することが多かったことから、そこだけを切り取って「遊び仲間もつけない孤独な子」といったキャラクターにもついでいこうとする人があるが、ずいぶん乱暴だと思う。家族関係について補足しておく、すぐ上の3人のきょうだいは彼が生まれる前には亡くなっている。したがって、一番近い姉でも14歳離れており、一緒に遊んでくれる関係ではなかった。また彼の生まれた家は**集落の北の外れ**にあったので、近所に同年代の子供があまりいなかったとしてもおかしくはない。

周囲に遊び仲間が少なかったせいもあるのだろう、母親であるナンシーはエジソンを溺愛



エジソン幼年期地図

父：サミュエル…………… 1804 生 (43 歳上)
 母：ナンシー …………… 1811 ごろ生 (36 歳上) 1828 結婚
 長女：マリオン…………… 1829 生 (18 歳上)
 長男：ウィリアム・ピット …… 1832 生 (15 歳上)
 次女：ハリエット・アン …… 1833 生 (14 歳上) 別名タニー、結婚後 30 歳で没
 次男：チャーリー …………… 1836 生～1842 没 (エジソン誕生時にはいない)
 三男：サミュエル・オグデン三世 1840 生～1843 没 (エジソン誕生時にはいない)
 三女：エリザ …………… 1843 生～1846 没 (エジソン誕生時にはいない)
 四男：トーマス・アルバ …… 1847 生

エジソンの家族

し、時間の許す限りそばにいてあげた。これに対して父親サミュエルとの関係についてはよくわからないところがある。なぜなら、何にでも疑問を感じ、納得するまで観察や質問を続ける息子を煩がり、距離を置いていたと書く資料が少なくない一方、『20世紀を発明した男』では「父サミュエルはことのほかアル(幼少期のエジソンの呼び名)をかわいがり、土曜日の晩になると、まとわりつくアルをつれて町の広場までぶらぶら歩いて行っではバンド演奏を楽しんだものだった」と記しているからだ。本書では後者の説明のほうが事実に近いと考えるが、ただ、この一件だけを見てもエジソンに関する情報はブレが大きく、真実を追究していくのは簡単ではないことがわかっていただけたと思う。

エジソンが生まれたオハイオ州ミランは、カナダとの国境に連なる五大湖のひとつエリー湖の南

Deep View

*14歳に

年齢に関して本書では誕生日を0歳、その後、年が新しくなる段階で自動的に1歳ずつ増えていくこととし、誕生日は考慮しない（つまり1月1日に加齢する）。

*集落の北の外れ

グーグルで「Edison Birthplace」と検索すると地図が出てくる。生家は木造建築が並ぶ集落から少し離れたところに建つレンガ建築の家だったそう。今は「Thomas Edison Birthplace Museum」という名前の博物館になっている。（<http://tomedison.org/>）

にある小さな町だ。五大湖はすべて合わせると約24万平方キロメートルあり、イギリスの国土面積にも匹敵する広大な水域である。しかもそのころにはすべて運河で結ばれていたうえ、大西洋へも出入り可能だったことから「北米の地中海」と呼ばれていた。水運の良さを活かして周囲の町では早くから運輸業や製造業、商業などが発達しており、川や運河を経由してエリー湖につながるミランも最盛期には世界有数の穀物出荷港として栄えたという。

7歳のとき、エジソン一家はやはり五大湖のひとつヒューロン湖に面したミシガン州ポートヒューロンに引っ越した。転居の理由は新設される鉄道のルートからミランが外れて衰退が始まったからで、父親サミュエルはいつも「一発当てたい」と考えながら職を転々とする山師タイプだったので機敏に新天地を求めたのだろう。加えて、大事な末っ子を教育環境の整った土地で育てたいという親心もあったと信じていた。

カナダとの国境沿いの港町であるポートヒューロンは交通の要衝として早くから拓けていた。加えて、すでに馬車や自転車製造で発展していた工業都市デトロイトの衛星都市という位置づけもあったので人口が急増しており、町中が活気にあふれていたという。

ところがそんな希望の町でエジソンは猩紅熱にかかってしまう。全身に紅色の発疹がでる伝染病は今では抗生物質で簡単に治るものの、そのころは難病だった。子供が発病すると高熱が続き、重篤な症状を引き起こすこともあったため、かなり恐れられていたようだ。ちなみにヘレン・ケラー（1880年生まれ、エジソンの33年後）が視力と聴力を失ったのも

この病気のせいだったと言われている。それまでに多くの子供たちを亡くしていたエジソン一家にとってはかなり深刻な事態だったはずだ。

幸い、エジソンの症状はそこまでひどくはならなかったものの、もともと病弱だったせいもあり、学校に通わせるのを1年遅らせた。なお、彼は後年、耳の聞こえが悪かったと言われているが、その原因はこのときの病気だと考えられている（聴力に関するエピソードは第2章で詳しく触れる）。

そんなこんなで、小学校に入学したのは1855年、8歳のときだった。